

旦那様は魔法使い

## 登場人物紹介

### サフィール

一流の魔法使いで、アニエスの夫。研究者気質の無愛想な青年だが、妻には惜しみなく愛情を注いでいる。アニエスとは幼馴染だった。

### アニエス

サフィールの妻。島で唯一のパン屋を営む。心優しい性格で、働き者。島の住人達にも慕われている。

### エドワード・クレス

島の新しい領主様。有能で好感の持てる美青年だと評判だが実は妻があるようで……？

### カサス

エドワードの従者。人懐こい性格をしたゆるいワリの青年で、主にも気軽に接する。

### 使い魔猫達

サフィールと契約する七匹の猫達。

ネリー

ライト

カル

アクア

キース

セラフィ

ジェダ



## 目次

|                               |     |
|-------------------------------|-----|
| <b>旦那様は魔法使い</b>               | 7   |
| アウトロー夫妻の一日                    | 8   |
| 家族でバカンス                       | 55  |
| 新しい領主様と噂話                     | 97  |
| 旦那様の嫉妬 <small>しつと</small> と不安 | 117 |
| 領主様の罠 <small>わな</small>       | 133 |
| 魔法使いの報復                       | 160 |
| 君は誰のもの                        | 177 |
| 騒動の結末                         | 192 |
| 実りの秋と冷たい雨                     | 206 |
| <b>番外編 使い魔猫達の休日</b>           | 231 |
| <b>番外編 病院嫌いな旦那様</b>           | 251 |
| <b>番外編 幼馴染は魔法使いの弟子</b>        | 275 |

旦那様は魔法使い

## アウトロー夫妻の一日

アニエス・アウトローの朝は早い。

仕事のある日は早朝五時。彼女は決まってこの時間に目を覚ます。

そんな彼女とは対照的に、隣で眠る夫——サフィール・アウトローの朝は遅い。放っておけばいつまでも寝続ける。

「ふふっ」

アニエスは横になったまま夫の無防備な寝顔を眺め、思わず笑い声を零した。

二人で使うには少し広い寝台の上、身体を丸めて眠るサフィールは、まるで大きな猫のように見える。

くうくうと眠る彼に、アニエスはい見入ってしまう。こんなに大きくなったのに、寝顔は子どもの頃のまんまなのね、と。

彼女が夫と共に暮らす島——クレス島は王政の国、カルディア国の領海上に浮かぶ島だ。

そしてアニエスとサフィールは、元々この島で生まれ育った幼馴染。アニエスの両親は、事情により島を離れるまで、島の北部で牧場を営んでいた。その牧場の傍にあつた森の中で、魔法使いの

師匠と一緒に暮らしていたのがサフィールだ。近所には他に歳の近い子どもはおらず、二人は兄妹のように育った。

アニエスは今年の春に二十歳になったばかり。彼女より二つ年上のサフィールは、褐色の肌は銀色の髪をしている。島の漁師達もよく陽に焼けているが、サフィールの肌は生まれつきだ。彼は『森の民』と呼ばれる異民族の末裔なのだという。だからだろうか、顔立ちもこの辺りの人間とは少し違っている。聞くところによると、森の民は目鼻立ちがはっきりした顔つきが多く、表情に乏しいそうだ。確かにサフィールは顔の造りが整っているものの、あまり表情が変わらないので怖がられたり、冷たいと思われたりすることもある。だが彼が時折見せてくれる笑顔や幼い寝顔が、アニエスは大好きだった。

そんな夫の寝顔をもう少し眺めていた気もしたが、そろそろ起きなければ。

アニエスが身を起した時、隣で「ううん……」と声がして、サフィールが寝返りを打った。そしてゆっくりと、彼の喉が開かれる。

「んう……？」

サフィールの双眸は、右が赤で左が青のオッドアイだ。その異色の目はアニエスの姿を捉えると、ゆるりと眩しげに細められた。

「……アニエスだ」

そう眩くなり、彼は妻の身体をぎゅっと抱き寄せる。

「きゃっ」

「ん……」

サフィールの腕の中に閉じ込められてすぐ、アニエスの唇に熱いものが触れた。サフィールの唇だ。それは触れ合うだけでは足りないとおぼかりに、舌でアニエスの唇を押し開き、口内に侵入してくる。

ぴちゅつ、ぴちゅつ……と、互いの唾液が絡み合う淫らな水音が響いた。

寝起きだというのにサフィールの舌はやけに活発で、貪欲にアニエスの舌を求める。

「んあつ、ちょ、ちよつと……サフィール……」

同時に、サフィールの手がさわさわと胸や腰、お尻を撫で回す。その手付きに性的欲求を感じ、アニエスは慌てた。

そろそろ起きて朝の支度を始めなければならないのだ、こんな戯れをしている場合ではない。

「だめ、やめて」

「んー」

制止するものの、身体を弄る彼の手は止まらない。アニエスは必死に身を振って離れようとするが、しっかりと抱きつかれているため無駄な抵抗に終わった。それどころか……

「えっ……!」

アニエスの寝巻のボタンが、プツツ、プツツとひとりでに外れていく。

(ま、魔法を……)

サフィールは魔法使いである。普通の魔法使いは杖を用い、長い呪文を唱えて魔法を使うらしい

が、彼は簡単なものなら杖を用いず、無詠唱で使える。

こんなことに魔法を使うなんて……! と、アニエスは絶句した。

そうこうしている間に寝巻の前が開かれて、下着に包まれたアニエスの胸がぼろんと零れる。仰向けでもなお存在感を放つ豊かな乳房に引き寄せられるように、サフィールはその膨らみに顔を埋めた。

「ふあつ……」

露わになった肌をペロリと舐められ、アニエスは思わず声を上げる。

「も、もう……!」

「んん……」

胸の谷間に顔を挟んだサフィールは気を良くしたようで、悪戯をどんどんエスカレートさせていく。

彼の指先がクリクリと、下着に包まれた胸の頂を弄った。そうされると、腰がざわついて力が入らなくなってしまう。

「ひゅっ、や、やめて」

「ん」

「やめて、サフィール。っ、だめよ」

「……………やだ、やめない」

言うなり、サフィールはアニエスの胸をかぶつと甘噛みした。

そして微かについた歯型をなぞるように、舌先で彼女の肌をくすぐる。

「あっ……ん、や、あ……」

アニエスの白い肌が、サフィールの唾液で淫らに濡れていく。

サフィールはただ舐めるだけでは飽き足らず、ちゅうつときつく吸い上げては、赤い痕を残していった。

アニエスの胸には、彼が昨夜つけた痕も散っている。それをさらに濃くするように、あるいは新たな痕を刻みつけるように、サフィールは彼女の肌に赤い花を咲かせていく。

そうやって痕を残されると、ちよっぴり痛い。でも、その痛みにさえ身体の奥が疼いてしまう。

やがて疼きは大きくなり、このまま快感に流されたい気分になった。しかし、そんなアニエスを思い止まらせたのは、他ならぬサフィールの唇であった。

「だめ！」

彼の唇がゆっくりと胸元から首筋へ這い上がった時、アニエスは強く抵抗した。

見えないところに痕を残されるのは、少し恥ずかしいけれどまだ良い。

だが、首筋などに残されるのは、とても困る。もし他の人に情交の証を見られてしまったらと思うと、耐えられないほどの羞恥に襲われた。

「や、やめてサフィール！」

「やだ、もつと……」

アニエスはサフィールを押しつけようとするが、彼も負けじと、体重をかけて押し返ってくる。

そんなサフィールの手が胸を包む下着を脱がそうとした時、ついにアニエスの我慢が限界を超えた。

「っもう！ やめてっって言ってるでしょう！」

「わっ」

彼女は渾身の力を込めて、彼の身体を突き飛ばす。

そしてすぐに寝台から離れると、魔法で乱された寝巻を手早く整えた。

「いたた……」

突き飛ばされた拍子に、サフィールは寝台の横の壁に頭をぶつけたらしい。痛そうに頭の後ろを擦っている。けれど、同情する気にはまったくなれなかった。むしろ当然の報いというものだ。

「サフィールの馬鹿！ 朝からなんてことをするのよ」

「……………ごめん。つい」

ついでにわいよ、とアニエスは柳眉を逆立てる。

だが当のサフィールはちっとも悪びれず、身繕いを済ませたアニエスに近付くと、その頬にちゅっときスをした。

「おはよう、アニエス」

「……おはよう、サフィール」

アニエスはサフィールの悪戯を完全に許したわけではなかったが、彼の頬におはようのキスを返した。

微かに目を細めたサフィールは、ぼそりと呟く。

「……早く夜にならないかな」

夜になれば、思う存分愛し合えるのに……と、その瞳が語っている。

サフィールがこうして自分を求めてくれるのは、正直嬉しい。

けれど、彼はたまに時と場所を選ばないので、アニエスは困ってしまうのだ。

「……もう。続きは夜までおあずけよ」

「楽しみにしてる」

アニエスがため息まじりに言うと、サフィールは嬉しそうに微笑んだ。

私って、この人に甘過ぎるかしら……？　と思いつつ、アニエスは二度寝するというサフィールを置いて浴室に向かった。

浴室の洗面台で蛇口を捻り、顔を洗う。顔を上げて正面を見ると、鏡の向こうで、紺色の目がパチパチと瞬きをした。

アニエスは雪国出身であった母親に似て、肌が白く、黒髪の艶やかな娘である。顔立ちは彼女の内面を表すように優しげだ。足や腰はほっそりとしているのに胸はとても豊かな、女性らしい身体付きをしている。

「よし、今日も頑張ろう」

濡れた顔をタオルで拭い、彼女はにっこり笑って鏡に映る自分に言い聞かせる。

さあ、忙しい一日の始まりだ。

クレス島は、古くは海上貿易の中継地点として開拓された土地であった。

島の南部には巨大な交易船を何隻も停めることのできる大きな港がある。その港から広がる街は、島の中央に位置する山の起伏にそって造られていた。緩やかな斜面を階段状にならした上に建物が並んでいるのだ。島の北側には森林地帯が広がり、そこは一部開拓されて牧場や農園、果樹園が営まれていた。

島の人々は、海と大地の恵みを享受しながら穏やかに暮らしている。

アニエスは港街で、たった一軒しか無いパン屋を経営する女主人だ。生まれ育ったこの島でパン屋を開くのは、彼女の長年の夢であった。その夢が叶ったのは、一年ほど前のことになる。サフィールと結婚したのも、同じ頃だ。

寝巻からござっぱりとした白いシャツと紺のスカートに着替えたアニエスは、腰まで伸ばした黒髪を緩く編みながら、一階へ下りていった。

二人の住む自宅の二階には、夫婦の寝室と浴室。一階には夫の使い魔である猫達が住む部屋と、トイレ、ダイニング兼リビング、アニエスの経営するパン屋と厨房がある。

アニエスはまず厨房に向かった。

真っ白いエプロンを着けて手を洗い、昨夜仕込んでおいたパン生地の状態をチェックする。そうして一時間ほど、一人でパン生地を分割したり丸めたりした。

アニエスは、家族がまだ寝静まっている早朝に、黙々とパン生地を扱う時間が好きだ。

一晩寝かせて発酵させたパン生地はほんのり温かく、柔らかくて触り心地が良い。もちろん、パンの種類によっては扱い難い生地もあるが、頭の中で効率のいい順番を考えながら作業を進めていると、あつという間に時間が過ぎていく。

「ふう……」

作業に一段落つけ、アニエスはべたつく手を洗った。

そして冷蔵庫からミルクの瓶を取り出すと、それを持って使い魔猫達の部屋へ向かう。使い魔猫とは、魔法使いである夫、サフィールに仕えている猫達だ。

ドアを開けると、色違いのクツシヨンの上に丸まって眠る七匹の猫達。毛色は黒、白、灰、茶、白と黒のブチ、灰と黒の縞、三毛とそれぞれ違う。

「おはよう、みんな。もう朝よ」

アニエスが声をかけると、まず黒猫がぴくりと身動いだ。

「んにゃ……。おはようございますにゃ。奥方様」

眠そうに前足で顔をコシコシと擦りながら、黒猫が言う。

使い魔猫達はみんな人語を解し、喋ることができるのだ。

「おはよう、カル。みんなのお皿にミルクを入れておくわね」

「ありがとうございますにゃ」

クツシヨンの傍に置かれた七つの皿に均等にミルクを注ぎ、アニエスは部屋を出た。じきに他の猫達も目を覚ますだろう。

アニエスは空になったミルク瓶を片付けて、再び厨房に入る。そして作業台の上に、小麦粉や卵などの食材を新たに並べ始めた。

あらかた準備したところがかちやりとドアの開く音がし、朝のミルクを飲み終えた七匹の猫達がぞろぞろと厨房へ入ってくる。

「「「「おはようございますにゃ。奥方様」」」」」

「おはよう。みんな」

声を揃える猫達に、アニエスにはっこりと微笑み、挨拶を返す。

「それじゃあ、今朝の役割分担よ」

アニエスは腰に手を当て、猫達に言い聞かせ始めた。

使い魔猫達は主人のサフィールを補佐する存在だが、彼の妻であるアニエスのお手伝いもしてくれるのだ。お店を開く日には、朝の六時半頃から猫達の仕事が始まる。

「カルとジェダは、お店と一階のお掃除」

「「にゃー」」

黒猫カルと白猫ジェダが揃って返事をする。

「ライトとネリーは、厨房のお手伝い」

「「にゃー」」

今度は灰色猫ライトと茶色猫ネリーが声を上げた。

「セラフィとアクアは、菜園の水やりと草むしり」

「にゃー」

三毛猫セラフイと縞猫アクアが同時に返事をする、一匹だけ名前を呼ばれていないブチ猫キースが、期待の眼差しをアニエスに向ける。

「そしてキースは……市場へお使いよ！」

「にゃあ！」

待つてました！ とばかりに、キースが一鳴きした。

朝のお手伝いの中で、猫達に一番人気の仕事は、港の市場へのお使いである。

アニエスが頼まれたものを買う途中、市場の人々がよく食べ物を買ってサードビスしてくれるためだ。

他の猫達が羨ましそうにキースを見つめる中、アニエスは「よろしくね」と言いながら、お使いの内容を書いた紙をキースに差し出した。

すると、ぼわんつという音がしてキースの周囲に煙が上がる。煙が晴れると、ブチ猫のいた場所には一人の少年が立っていた。

黒から白にグラデーションのかかった髪、白い猫耳に赤銅色の瞳。年の頃は十二か十三ほどに見える。少年の姿になったキースだ。使い魔はこうして、人に変身することもできる。

「行ってきますにゃん」

キースは紙を受け取り、お尻から伸びる白い尻尾を楽しそうに揺らしながら、張り切って出かけていった。

「さあ、他のみんなもお願いね」

朝の仕事が一段落したら、美味しいごはんを食べましょう。

アニエスがそう告げると、猫達は目を輝かせて「にゃあ〜！」と声を上げ、人の姿になって仕事に取りかかった。

アニエスは猫達とパン作りをしてから朝食の準備をし、サフィールを起こして一緒にリビングへ向かう。猫達はすでに全員が席に着き、主人夫婦を待っていた。

「「「「「おはようございますにゃ！ ご主人様！」」」」」

「おはよう」

元氣いっぱい猫達とは対照的に、サフィールは目をしょぼしょぼさせて、ふあああとあくびをしながら席に着く。

アニエスは夫の姿に苦笑を浮かべ、椅子に腰を下ろして両手を合わせた。

それに倣い、猫達も揃って手を合わせる。

「大地と海の恵みに」

「「「「「恵みに」」」」」

アニエスが口にした祈りの言葉は、食事の始まりの合図。

今朝のメニューは、新鮮な魚を使ったパイと、ほうれん草とベーコンのサラダ。それから野菜たっぷりのコンソメスープに、焼き立てのパンだ。

猫達は真っ先に、大好物のパイにかぶりつく。

「そんなに焦らなくても。おかわりもあるわよ」

食欲旺盛な猫達にくすくす笑いながら、アニエスもパイを切り分けて口に運ぶ。ちらりとサフィールを見ると、彼は「とても美味しいよ」と微笑んでくれた。

猫達も口々に、「美味しいですよ!」「最高ですよ!」「絶品ですよ!」と褒め言葉を口に。スープやサラダも好評で、あつという間に食べ切ってしまった。

慌ただしい朝食のデザートに、果樹園から貰った林檎の皮を剥いて出す。

「はい、サフィールの分」

剥いた林檎を皿に載せてサフィールの前に置くと、彼はこくりと頷いて、無言でしゃくしゃくと食べ始める。続けて猫達にも出したところ、それまでお喋りをしていた彼らはとたんに静かになって、無心に林檎を頬張り始めた。

この猫達は、何故か林檎を食べている時は静かなのだ。

(……サフィールとおんなじね……)

どうやら、猫達はご主人様に似たらしい。

アニエスは笑って、自分も林檎をしゃくりとかじった。

朝食を終えると、アニエスとサフィールはそれぞれの店の開店に向けて動き出す。

サフィールは寝室で着替えてから、アニエスのパン屋の真上にある自分の店に向かった。

彼はこの島でたった一人の魔法使いである。

カルディア国は他国に比べて魔法の研究が盛んだが、クレス島のように王都から離れた田舎には、魔法使いや魔女が一人もいないことが多い。魔法は生まれつき魔力のある者にしか扱えず、力の強い魔法使い達は名誉と富を求め、王族や貴族に仕える。

だが、田舎に店を構えて市井の人々の役に立つ者もいる。彼らは古くから「魔法使い様」「魔法女様」と敬われ、親しまれてきた。

サフィールもその一人だ。占いをしたり、お守りなどのまじない物や魔法薬を売ったりしている。そんな彼の店のお得意様は、この島の船乗り達。天候や航路の占い、航海安全のお守りを求めて店を訪れる。サフィールの占いはとても良く当たると評判で、最近では観光客も多く訪れるようになった。

店に着いたサフィールは、いつも通り黒いローブを羽織った。そしてそら中に積んである本の山から一冊を抜き出し、店の奥に置かれた椅子に腰かけて読み始めた。客が来るまでは、彼はこうやって好きに過ごしている。サフィールの店の扉には、『開店中』などの札がかけられていない。鍵が開いていれば開店中。定休日はアニエスのパン屋と同じだが、突然店を休みにすることがあるし、明確な営業時間も無い。ちょっと不親切だけれども、それが彼のやり方である。

そして今日、開店してから一人目の客は占いを求める客だった。

カーテンで仕切った占いのスペースで、サフィールは一人の男と向かい合わせに座った。男は大陸の船乗りで、仕事でこの島の港を訪れたらしい。これから大陸へ戻るため、航海が無事に済むかどうかと、加えて船乗りとしての自分の将来を占ってほしいそうだ。

「そういえば、魔法使い殿」

よく陽に焼けた、どこか愛嬌のある若い船乗りが、声をひそめてサフィールに話しかけてくる。サフィールが水晶を見ている間の沈黙に耐えられないようで、座ってから何度も他愛無い世間話を振ってくるのだ。

「仕事の先輩に、この島にとっても美しいパン屋の女主人がいると聞きましてね」

「……………」

「ちょうどこの店の真下なのでですね。実は先程、開店前でしたが窓から覗いてみまして」  
噂通りとても綺麗な人でした！ と、男は興奮気味に言う。

「あの美しい漆黒の髪！ 潮風に当たっているとは思えないほど艶やかで綺麗だ！ それにあの白い肌！ 真珠みたいでしたよ」

日ごろ、陽に焼けた人間ばかりを見ているので……、と男は照れたように笑った。

「あんなに透き通った白い肌は、王都でもそうそう見ません。まるでどこぞのお姫様みたいだ」  
うっとりしながら自分の妻を褒めそやす男に、サフィールの眉がきゅつと寄せられる。  
アニエスが美人なのは紛れも無い事実だが、他の男の口から語られるのは不快だった。

「何よりあのっ、豊満な胸っ！」

「……………」

確かに、アニエスの胸は豊かである。

それが人の、特に男達の目を引くことを、サフィールはよく知っている。

男達が下心丸出しの目で妻を見るたび、サフィールはその目を潰してやりたくなるのだ。

「いやあ、あんな美女の近くで働ける魔法使い殿が羨ましいですよ」

まさかその美女が目の前に座る魔法使いの妻であるとは露知らず、船乗りは意気込んだ様子で話を続ける。曰く、島を離れる前に何度も通いつめようと思っっているだとか、勇気を出して口説きたいだとか。

「そうだ！ 彼女との相性も占ってくださいよ」

サフィールは眉間に深い皺を刻んだまま、「出ました」と小さく呟いた。

「おお……………！ どうですか？」

「航海は安全です。海が荒れることはないでしょう。そして、あなたの将来ですが……………」

普段あまり表情を変えないサフィールが、珍しくにつこりと笑みを浮かべた。

「女難の相が出ています。女性との関わりは極力避けた方がいいでしょう」

特に美女は、近付くだけでも酷い目に遭うので気を付けてくださいね。サフィールは笑顔のまま、それはそれは爽やかに宣告した。

男は何やら悪寒のようなものを感じ、慌てて船に帰っていったという。

その頃、アニエスは店の棚を焼き立てのパンでいっぱいにし、寝室に戻って身支度を整えていた。緩く編んだ髪を解き、白地に紺の二本線が入ったバンダナを巻く。それから、エプロンも接客用の白いエプロンに替えた。

アニエスを手伝って接客をこなす猫達も、お揃いの黒いエプロンを着け直す。

開店時間の九時までもうすぐ。それまでに、アニエスは店の周りに置いてある花のプランターに水をやり、パンの値札が間違っていないかを確認する。

そうして時計の針が九時を指すほんの少し前、扉のプレートを『クローズ』から『オープン』に替えて、開店だ。

カウンターの立つて最初のお客さんを待っていると、カランカランと来客を告げるベルが鳴る。

「いらつしやいませ！ ようこそ『アニエスのパン屋』へ」

にっこりと微笑んで、最初のお客さんにご挨拶。

さあ、今日はどんな一日になるだろう。

午前中は、朝の漁から帰って来た船乗り達が、早めの昼食用のパンを買いに訪れる。

人気なのは、食べ応えのある黒パンを使った日替わりサンドイッチ。今日の具はタマゴとハム、トマトにツナもある。

また、ふわふわのコッペパンに、パリッと焼いたソーセージを挟んだホットドッグも人気だ。

客は店を訪れる者だけではない。契約しているレストランや食堂へのパンの配達も、この時間帯の重要な仕事だ。とても一人では間に合わず、猫達の力を借りている。

使い魔猫達は毎日交代で、アニエスとサフィールの店を手伝う。二匹はパン屋の厨房でパン作り、二匹は店内で接客したり配達に行ったり。そして残りの三匹は、サフィールの店で助手をするのだ。

配達係の二匹を送り出したあと、アニエスは接客を他の二匹に任せ、洗濯などの家事を慌ただしく済ませる。働き者の母の背中を見て育ったアニエスは、店を営みながらも、決して家事を疎かにしない。

今日もお客さんの入りは上々で、午前中はあつという間に過ぎていった。

そしてお昼。今度は軽食やおやつにパンを求める人々が賑わう。

中には毎日のように来てくれる客もいる。そんな常連さん達に人気なのは『今日のおすすすめパン』。その日手に入った新鮮な食材を使って作られるため、日替わりでメニューが変わる。

本日は、ほうれん草を練り込んだ生地に、小さく刻んだチーズを入れて焼いたパン。ほうれん草の優しい甘みと、チーズの塩味がとても良く合っている。

ちょうど昼食の時間に焼き上がるよう作ったそれは大好評で、あつと言う間に売り切れた。

他にも、サンドイッチやベーグルサンド、白パンや硬く焼き上げたバゲットなどが人気商品で、どんどん売れていく。

そして昼を過ぎ、少し客足が減ったところで、アニエス達は交代で休憩に入る。

店番の猫達を残し、サフィールと他の猫達で昼食をとるのだ。

三食のうち一番慌ただしい昼食を終え、店に戻る。

ここからの時間帯は、客足は少し減るが、夕方の来客に備えてパンを補充しなければならない。使い魔猫を一匹店番に残し、アニエスはもう一匹と共に厨房に籠ってパンを焼いた。フルーツを

使ったデニッシュなど、甘いパンもたくさん準備する。

売り切れて寂しくなった棚が再び焼き立てのパンでいっぱいになった頃、アニエスは猫達に店を任せて自宅に戻った。朝に干しておいた洗濯物を取り込むのだ。

物干し場のある屋上に上がり、洗濯物を一つずつ籠に取り込みながら、アニエスは青い空を見上げた。

「今日も良い天気ね」

街の至る所に春の花が咲き乱れ、新緑が芽吹き、甘く爽やかな香りが風に乗って運ばれてくる。草と花の香りがまじった、春の匂いだ。

アニエスがサフィールと結婚式を挙げたのも、ちょうどこの季節だった。あの日も今日のように天気が良くて、たくさんの花が咲いていたっけ……

あれから一年。あつという間に過ぎ去った気がすると、アニエスと思う。

「……あら……？」

洗濯物を取り込んでいる最中、子どもの泣き声が聞こえてきた。

気になって屋上の端へ歩み寄り、声のする方——店に面した大通りを見下ろしてみると、一人の少女が泣きながら道の端で蹲っている。年の頃は六つかそこらだろうか。人の姿になった猫達よりも大分幼い少女だ。

「迷子かしら……？」

周りに保護者らしい大人の姿は見当たらなかった。

見覚えの無い顔だ。観光客の子どもだろうか？

アニエスは洗濯物を取り込むのをいったん中断すると、外階段を下りて大通りへ向かった。

「どうしたの？ 大丈夫？」

少女に駆け寄り、怖がらせないように、膝を折って目線の高さを合わせる。

「ふええええええ！」

だが少女はアニエスの顔を見て、いつそう泣きじゃくった。

知らない大人に声をかけられて怖かったのだろうか。そう思いつつ、アニエスは優しく問いかける。

「迷子になったの？」

「ふえっ、うっ、うん……」

辛抱強く事情を聞くと、少女は先日、両親とこの島にやって来たそうだ。そして今日、港街を歩き回っているうちに、両親とはぐれてしまったのだと言う。

「て、手え、はなしちゃ、だめえ、いわっ、いわれたのに……」

「そうだったの。今日はとても混み合っているものね」

大通りはたくさんの人で溢れている。この人混みの中では、小さな子が手を離してはぐれてしまふのも無理はない。

「うああああああんー！」

「あらあら……」

見知らぬ土地で親を見失ってしまい、ずっと不安だったのだろう。少女はアニエスのスカートにぎゅっと抱きついて、大声で泣き出した。

その小さな身体を、アニエスはそっと抱き返す。

「大丈夫よ。ご両親もきつとあなたを探しているわ。私も一緒にご両親を探してあげる。だから、ね？ 泣かないで」

「ひっ、う、うううう、うああああん！」

「まあ……」

アニエスが優しく頭を撫でてでも、どんなに宥めても、涙は堰を切ったように次から次へと流れ出す。

(困ったわ……)

この人混みの中で少女の両親を探すには、外見の特徴など、もう少し情報が欲しいところだ。泊まっている宿がわかれば送っていけるが、両親だってこの子を探していると思うし、行き違いになるかもしれない。

だがどちらにせよ、少女はわんわんと泣いてしまつて、これ以上話を聞き出せる雰囲気ではない。これは泣きやむまで待つて、それから探すべきだろう。

そう結論づけて、アニエスは「大丈夫、大丈夫よ」と励ましながら、宥めるように少女の背をしっかりとん擦る。

「あの……、大丈夫ですか？ お嬢さん」

「俺でよければ力になりますよ！」

「お、俺も！」

アニエスが少女を慰めていると、観光客らしい若い男性が三人、声をかけてきた。

三人とも何故か鼻息が荒い。彼らの妙な勢いにアニエスはたじろいだ。

「え、ええと……？」

三人はアニエスが迷子の少女に声をかけたところを見ていて、それで手を貸そうと思っているのだろうか？

(気持ち嬉しいのだけど……)

「その子、迷子なんでしょう？ 俺が一緒に探しますよ！」

「なっ、俺一人で十分だよ！」

「いやいや俺が……」

男達があまりにもぐいぐいと詰め寄ってくるので、少女が怯えてしまっている。

「あの、待つて……」

アニエスが制止しようとしても、三人の勢いは止まらなかった。

「そのあと一緒にお茶でも！」

「いや、俺と一緒に！」

「奢りますよ！」

「こ、困ります……」

話が段々おかしな方向へ進んでいるようだ。

どうしたものかと困っていた時、ふいに男達の後ろから聞き慣れた声が響いた。

「アニエス、どうしたの？」

三人の後ろからそう声をかけてきたのは、店にいるはずのサフィールだった。

「サフィール。どうしてここへ？」

「店の近くで子どもの泣き声があるって、猫達が教えてくれたんだ」

答えながら、サフィールはアニエスに迫っていた三人をじろりと睨む。

「見に来て良かったよ」

その冷たい視線に男達は「ひっ」とたじろぎ、「だ、大丈夫みたいですわね！」と逃げるように去っていった。

見知らぬ男達に詰め寄られて困惑していたアニエスは、ほっと胸を撫で下ろしつつ、サフィールに事情を説明する。

「あのね、この子、迷子なんですって。ご両親とはぐれてしまったみたい」

「ふうん」

ジロジロと自分の顔を覗き込むサフィールに、少女はびくっと身体を震わせた。

「ふえっ……うええええんん！」

「サフィール！」

ぶしつけな視線が怖かったのだろう。ますます少女を泣かせてしまった夫を、アニエスは責める

ように睨む。

「ごめんなさいね。この人は怖い人じゃないのよ。私の旦那様なの」

「うっ、だんな、さま？」

「ええ」

「……泣かせて悪かったよ」

「……やっ」

ばつが悪そうな顔でサフィールが謝っても、少女の警戒は解けないようだ。アニエスのスカートにぎゅっとしがみついたままでいる。

怯える少女に、サフィールは肩を疎める。そして「しょうがないな」と呟くと、徐に空を指差して言った。

「二人とも、空を見て」

「空……？」

突然何を言うのだろうか？ アニエスは首を傾げたが、言われるまま空を見上げる。少女も、恐る恐る……と彼女に続いた。

『花よ降れ』

言葉に魔力を乗せて、サフィールは魔法を放つ。

「わあ……！ お花だ！」

次の瞬間、青い空からピンクや黄色、白の小さな花がくるくると舞い下りてきた。



「すごい」

あれほど泣きじゃくっていた少女はすっかり泣きやみ、目を見開いて空を見つめた。そして、そっと伸ばした両手にぼすんと花が落ちてきたとたん、目を輝かせて「かわいい！」と歓声を上げる。

降ってきた花のうち、ほとんどは地面に落ちる前に消えてしまった。しかし、少女の小さな掌てのひらの上に載った花だけは、消えずに残っている。

「すごい！　すごい！　だんなさま、まほうつかいさまなの？」

「そうだよ」

そう答えて、サフィールは少女の頭をぼんぼんと撫なでる。

彼の顔には子どもが懐くような笑みなんて浮かんでいなかったけれど、先程の魔法は十分に少女の心を掴んだらしい。少女はきらきらした眼差しまなざしをサフィールに向けている。

「ありがとう、サフィール」

彼の魔法のおかげで、少女はすっかりご機嫌になった。

「これ、貰もらってもいい？」

「もちろん」

サフィールが頷うなずき、アニエスも「良かったわね」と微笑ほほえむ。少女はにっこりと笑って「ありがとう！」と言った。

それから二人は少女を連れて、サフィールの店に向かう。店にある道具を使って、少女の両親の

居場所を占うのだ。

少女は魔法使いの店に入るのは初めてだったらしい。薬の瓶やよくわからない道具、古い本が乱雑に仕舞われた薄暗い店の中を、きよるきよると見回している。

サフィールは古い客用の椅子に少女を座らせると、向かい側の椅子に座った。二人の間には小さなテーブルがあり、その上には大きな水晶の玉が載っている。

「……君の両親の名前は？」

「おとうさんはケイン。おかあさんは、クリス」

サフィールが訊ねると、少女は少し緊張した面持ちで答えた。

「そうか。それじゃあ、ご両親の顔をよく思い浮かべて、この水晶を見て」

少女は不安げに、サフィールの隣に立つアニエスに視線を送る。

「大丈夫よ」

アニエスが安心させるようににっこりと微笑むと、少女は小さく頷いて水晶に目を向け、じっと見つめ始めた。サフィールも無言で水晶に視線を注ぐ。

そうしてしばらくたつたあと、彼は「わかったよ」と呟いた。

「ご両親は港の方で君を探しているみたいだね。ノーラって呼んでいる。これは君の名前だろうか？」  
「っ!? すごい！」

少女——ノーラは、自分の名前を言い当てたサフィールを驚いたように見上げた。そして両親の姿が映っているのかと、目の前の水晶に視線を戻す。思わずアニエスも水晶を覗き込んだが、二

人には、ただの透明な球体にしか見えなかった。

それからアニエスとサフィールは、ノーラを港まで送っていった。サフィールにはノーラの両親がどの辺りにいるのかまで見えていたらしく、すぐに見つけることができた。

「おとうさん！ おかあさん！」

笑顔で駆け寄る娘に、両親は安堵の表情を浮かべてその身体を抱き締めた。

母親の瞳には涙が滲んでいる。はぐれた娘を、とても心配していたのだろう。

ノーラの両親は娘からアニエスとサフィールのことを聞くと、深々と頭を下げ、何度も「ありがとうございます」と言った。

「ありがとう！ おねえちゃん、まほうつかいさま」

「どういたしまして」

笑顔で手を振るノーラの髪には、サフィールが魔法で降らせた花が飾られている。港までの道すがら、アニエスが挿してあげたのだ。

アニエスはノーラが無事に両親に会えて良かったと胸を撫で下ろし、サフィールと共に自分達の店に戻ることにした。

「あっ！」

（そうだ洗濯物！ いけない、そのままだったわ！）

洗濯物をそのままにしていたことを思い出したアニエスは、慌てて家に向かって走り出す。サフィールは苦笑しながらも小走りになる。そして家に着くと「俺も手伝うよ」と、一緒に洗濯物を取

り込んでくれた。

アニエスのパン屋は夜七時で閉店だ。

今日も無事にパンを売り切り、達成感と疲労感でいっぱいになった身体で夕飯を作る。その間、店の後片付けは使い魔猫達がやってくれる。

今夜のメニューは鯛と野菜の蒸し焼きにフルーツサラダ、ニンニクとアンチョビを利かせたペロンチーノ。猫達にはペペロンチーノの代わりに、ミルクで米を煮たリゾットを出す。

急いで夕飯を作り終えると、珍しくサフィールが自発的に一階に下りてきた。普段はアニエスが呼びに行くまで、下りてこないのである。彼なりに、今朝妻を怒らせたことを反省しているのかもしれない。

全員が食卓に着き、食前の祈りを捧げてから食事を始める。サフィールは今回も「美味しいよ」と微笑んでくれたし、猫達はいつものように魚がつつき、骨まで綺麗に舐めて完食した。今日も家族が美味しそうに食事をするのを見て、アニエスはとても嬉しくなった。

食事を終えると、サフィールは二階の寝室に上がり、猫達もそれぞれ猫の姿に戻って自分達の部屋に向かった。

彼らを見送り、アニエスは後片付けと明日の仕込みを済ませる。仕込みは閉店作業の傍ら猫達と一緒に進めていたので、アニエスが一人でする作業はそう多くない。

それが終わると、アニエスは帳簿を手に、リビングダイニングの椅子に座った。

今日使ったお金と売り上げを記入し、日記欄にはその日の感想を短く書きつけているのだ。

昨日は、『サフィールがコーヒートのパンを気に入ったみたい。また作ろう』と書いた。

「今日は……」

アニエスは一日を振り返り、一番心に残っている出来事はなんだろうかと考える。

今朝は突然、寝台で悪戯をされて大変だった。

お店の売り上げは上々。猫達もよく働いてくれた。

それから……と目を瞑り、脳裏に浮かんだ光景はあの……

(ふふっ。サフィール、とっても素敵だったわ)

青い空から舞い下りた花々。それは迷子の少女を慰めるための、優しい魔法。

泣きじゃくっていたノーラがはあっと笑顔になった瞬間を思い出すと、心がほっこり温かくなる。

アニエスは微笑んで、日記の欄に『サフィールが迷子を助けてくれた。とてもかっこ良かった』と書いた。

今朝、自分の服を脱がすために魔法を使われた時は呆れてしまったけれど、あんな風に人を助けるためにも魔法を使える人なのだ。

そんな彼のことを、アニエスは改めて愛しく思った。

「……あら？」

ふと気付いて過去の記述を遡ってみると、日記の欄には『サフィール』で始まる文章が、ずらりと並んでいる。

「私、サフィールのことばかり考えてるのね」  
アニエスは小さく笑って、パタンと帳簿を閉じた。

二階に上がり寝室に入ると、サフィールの姿はすでに寝台の上にあった。寝巻に着替えていることからして、もうお風呂も済ませたようだ。

そんな夫の姿を見て、アニエスはそつと寝室と続きになっている浴室に入る。浴室の中央に置かれた猫脚の白いバスタブには、熱い湯がたつぷりと入っていた。

サフィールが入れておいてくれたのだ。朝から晩まで働くアニエスのために、彼は毎夜、彼女が寝室にやってくる時間に合わせて、浴室の準備を整えてくれる。

アニエスは夫の気遣いに微笑みながら、服を脱ぎ、身体と髪を洗ってバスタブに身を沈めた。熱い湯が疲れた身体をいやしていく。このままここで眠ってしまいたいほど気持ちが良い。

しばらく湯につかって身体をほぐし、バスタブの湯を抜いて浴室を出た。

濡れた肌と髪をタオルで拭いて、そのままタオルを巻き付けただけの恰好で寝室へ向かう。

鏡台の前に座ったら髪を乾かし、肌のお手入れだ。顔にサフィール特製の美顔水をつけていく。

透明で、さらさらしていて、ひんやりと気持ちが良い。アニエスの好きな鈴蘭の香りがほんのりするのにも気に入っている。

これを使うようになって以来、肌の調子がとても良い。アニエスから話を聞き、サフィールに商品として売り出してほしいと言ってきた人もいたが、彼は「面倒くさい」と断った。なんでも肌

の性質は人によって違うので、アニエスの肌に合わせて作ったものが万人に合うとは限らないとか。何より、美容関係の薬は調合が手間で、量産するのが難しいらしい。

アニエスは、夫が手間をかけて美顔水を作ってくれたのが嬉しくて、毎日大事に使っている。「……サフィール、もう寝ちゃったの？」

美顔水を塗り終え、寝台の上のサフィールに声をかけるが、返事は無い。

眠ったのかしらと近寄って顔を覗き込むと、彼の異色の目はしっかりと開いていた。「起きてるんじゃない」

くすりと笑って、寝台に腰かける。

そして、サフィールの銀の髪をさらりと撫でた。

朝はあれほど積極的に求めてきたくせに、今はアニエスが構ってくれるのを待っているようだ。そんな彼のことを可愛いと思いつつ、アニエスはサフィールの髪を撫で続ける。

すると、サフィールはアニエスの手を掴んで口元に引き寄せ、ちゅつと口付けた。構ってもらいたいとはいえ、いつまでも頭を撫でられるのは不本意なのだろう。

やがて彼は、アニエスの手を握ったり撫でたり、キスをしたり舌先で舐めたりと、好き勝手に悪戯を始める。

「くすぐりたいわ」

アニエスはくすぐすと笑って身を屈め、サフィールの頬にちゅつと口付けを落とした。

しかし、彼は唇へのキスじゃないのが不満なようだ。

「くすぐりたいわ」

アニエスはくすぐすと笑って身を屈め、サフィールの頬にちゅつと口付けを落とした。

しかし、彼は唇へのキスじゃないのが不満なようだ。

「くすぐりたいわ」

アニエスはくすぐすと笑って身を屈め、サフィールの頬にちゅつと口付けを落とした。

しかし、彼は唇へのキスじゃないのが不満なようだ。

「……どうして口にしてくれないの？」  
まるで小さな子どもみたいに拗ねている。

(そんな顔も可愛いと言ったら、もつと拗ねてしまっうんでしょね)

「だって、おやすみのキスだもの。あなたはしてくれないの？」

アニエスは微笑みながらも一度顔を近づけ、サフィールにおやすみのキスをねだった。

「……しない」

「あら、どうして？」

アニエスも本当はわかっている。わかっている、わざと焦らしているのだ。

案の定、アニエスはサフィールに手を引かれて、彼の腕の中に引っ張り込まれた。

こうなることは予想していたから、アニエスは余裕の顔でくすくすと笑う。そんな彼女の耳に、サフィールは唇を寄せて囁いた。

「まだ、『おやすみ』じゃないから」

そう、夫婦の夜はまだ始まったばかりなのだ。

アニエスは同意するように、彼の頬ではなく唇にキスをした。

「ん……ふ……っ」

最初は触れるだけだったキスが、徐々に深まっていく。

二人は抱き合い舌を絡ませながら、ゆっくりと互いの唇を貪り続けた。

「あっ……」

アニエスの唇からサフィールが離れたかと思うと、彼は彼女の身体からタオルを剥ぎ、吸い寄せられるように丰满な胸元へ顔を埋める。

「ん……、良い匂いだ……」

風呂上がりのアニエスの肌からは、愛用している石鹸の花の香りが、ほんのり漂うのだろう。サフィールがすすんと嗅ぐように息を吸い込むと、アニエスは羞恥に頬を染める。

「や、やだあ……」

「どうして？ 俺は好きだよ、アニエスの匂い」

サフィールはアニエスの胸をやわやわと揉みながら、白い首筋を舐め始めた。時折、かぶつと甘噛みを交える。

「ひゃあ……んっ」

舌で舐め上げられるねっとりとした感覚と、そつと歯を立てられる刺激に、ぞくぞくと快感が込み上げてくる。

「んっ、んんっ」

「アニエスはどこもかしこも美味しい。甘い果物みたいだ」

うっとりとしたサフィールの声が、アニエスの耳朶に響く。

やがて彼は、唇を徐々に下へと這わせた。

「あっ、ああっ……」

胸元から腹、下腹……と進んでいったかと思いきや、サフィールはいったん身を離す。それでも

う一度、首筋に唇を落とした。あちこちを舐められ、掠めるように肌の上を撫でられて、アニエスの息遣いは艶めかしいものへと変わっていく。

「んっ、んん……っ、あ……」

ちゅっつと音を立てながら、首筋に何度もキスをされる。サフィールの唇は再びアニエスの胸元へ移り、熱い舌が胸の頂を吸った。

「あっ……！」

今まで外されていた敏感な場所への愛撫に、アニエスはびくんと身体を震わせる。

その反応に気を良くしたのか、サフィールは薄紅色のそれをばくつと口に含んで、コロコロと飴を味わうように転がす。

「あっ、あっ、や、だめえ……っ」

「……アニエスはココ、感じやすいよね……」

微かに笑みを浮かべたサフィールの言葉は、熱い吐息と共にアニエスの胸元に吐き出される。

「ち、ちが……」

彼女は否定するように首を横に振るが、サフィールは笑みを深めて、もう片方の胸の頂にもむしゃぶりついた。

「あっ！ んん……っ」

先程までねぶられていた頂には、彼の指先が伸びる。

一方を熱い舌先で愛撫され、もう一方を指でクリクリと捏ねくり回されて、アニエスはひたすら

喘ぐことしかできなかった。

「あっ、あっ、ああっ……っ」

「ほら、勃ってるよ」

ふくりと勃ち上がった頂を摘まみながら自分の痴態を言葉にされ、アニエスの頬が赤く染まる。

「や……、言わない……で……」

「どうして？ こんなに可愛いのに」

自分を見下ろしつつそんな言葉を囁くサフィールの瞳は、情欲に燃えているように見える。アニエスは身体の奥がずくと疼くのを感じた。

「アニエスは可愛い……」

「んっ」

彼の唇が強引にアニエスの唇を奪う。

サフィールの舌は口内を蹂躪し、アニエスの舌を捕らえて離そうとしない。

この熱い舌がつかさつきまで自分の胸を舐めていたのかと思うと、それだけでドキドキした。

「はあ……ん、ん……っ」

はあはあと荒い息を吐けば、口の外に舌を引きずり出される。息を整える間も与えられず、サフィールの口内に引き入れられた。

狂おしいほど激しい口付けに、アニエスは自然とサフィールの身体に触れていた。

褐色の肌の上を、アニエスの白い手が這い回る。触れ合うごとに心が蕩けて、羞恥心や理性より

も情欲が勝り、二人を支配していくようだった。

「ふあっ……」

ようやく離れた二人の唇の間に、銀糸がつうつと伝う。

互いの唾液で濡れたサフィールの唇がにゅと笑みの形に変わるのを、アニエスはぼうつと見つめる。彼とのキスで、なんだか頭の芯が痺れてしまった。

「っ！ あ……あ……っ」

酩酊感に浸るアニエスに、サフィールの手が新たな刺激を送る。

彼の指が、不意打ちのようにアニエスの秘所に触れてきたのだ。

「や……あ……だめ……ッ」

細く長い指が秘裂をなぞり、くちゆりと音を立てて内側に押し入ってくる。

まだ触れられてもいないのに、彼女の蜜壺はしどどに濡れそぼっていた。

「濡れてるね……」

「あ……ッ」

彼の指は溢れる蜜を掻き回すように、くちゆくちゆと音を立ててアニエスのナカを犯す。

「もつと気持ち良くしてあげる」

サフィールも興奮しているのだろう。彼は掠れた声で嘔くと、身体をずらし、アニエスの秘所に顔を近付ける。

「やっ……！ だめ……！」

これから何をされるのかを察し、アニエスはサフィールを押しつけようと手を伸ばした。しかしそんな抵抗など物ともせず、彼は彼女の薄い茂みに口付けを落とす。

「ひあっ……」

敏感な場所に荒い息がかかり、アニエスはくすぐったいやら切ないやら、どちらともつかない感覚に身を震わせる。

膝を閉じたいのに、サフィールにがっちり太股を押さえられていて叶わない。

「んんっ……」

茂みの上にサフィールの鼻が当たっている。

秘裂に熱く濡れたものが触れたかと思うと、すぐにそれが奥へと入り込んだ。彼は舌で、アニエスの内側を愛撫しているのだ。

「あっ、ああっ……」

彼の舌の動きは、まるで甘い蜜を余さず舐め取らんとするかのようだった。その舌で襞を一枚一枚丁寧になぞられ、ますます蜜が溢れる。

「やあ……ああ……あ……っ」

「いやらしいね。いやらしくって、とつても素敵だよ、アニエス」

「いやあ……そこで……っ、喋らないでえ……」

秘所のすぐ側で嘔かれ、彼の吐息が秘裂にかかるだけで身が震える。

サフィールは、わざとそうしているのだ。寝台の上ではちよっぴり意地悪な夫の前で、アニエス

は淫らに啼くことしかできなかった。

「ひうつ」

今度は、サフィールの指がゆつくりと蜜壺に沈められる。ぬふ……ぬふと、粘着質な音がやけに大きく聞こえる気がした。

指を出し入れされ、かと思うと押し開くように舌で内壁をなぞられる。サフィールの舌と指は、ゆつくりとアニエスを追い詰めていった。

「あつ、だめ、だめ……」

アニエスは、自分の内側で燻っていた火が徐々に大きくなっていくのを感じた。快感が突き上げてきて限界が近いことを察し、アニエスは泣きながら首を横に振った。

けれどサフィールは愛撫の手を止めない。

「ふあああ……」

蜜で濡れた芽に彼の指が触れて、ゆつくりとなぞる。そつと優しく撫でるだけの動きではあるが、一番敏感なそこは、それだけでとても感じてしまう。

「ああつ、いや、だめ、きちやう……きちやう……からあ……つ」

芽をクリクリと弄られるアニエスの声に、必死さが滲む。

「んっ」

一瞬、サフィールの手が芽から離れた。

アニエスはほつと息を吐くが、次の瞬間……

「あああつ！」

さんざん撫でられて敏感になっていた芽が、ぱくつとサフィールの口に含まれた。そのまま熱い舌の上で転がされて、アニエスの身体がびくんと弓なりに反る。

不意打ちのような愛撫に、彼女は呆気無く果ててしまった。

「……あ……ああつ……」

激しい快感の余韻が、まだ身体に残っている。

アニエスは荒い息を吐きながら、動けずにいた。

そんな彼女を労るように、サフィールはアニエスの頭を優しく撫でる。

しばらくしてようやく息の整ってきたアニエスは、涙を湛えた目でサフィールを睨んだ。

「っつ、酷いわ、サフィール……あ、あんな……」

あんな騙し打ちみたいな愛撫をするなんて、と彼女は夫に恨み事を言う。

あられもなく果ててしまった自分が恥ずかしく、だからこそ余計にサフィールが恨めしかったのだ。

「ん、ごめんね。機嫌直して……」

拗ねるアニエスに謝ってから、サフィールは彼女の右手を掴んで甲にちゅつとキスをした。

ご機嫌とりのキス。だが、それだけでは終わらない。

彼はアニエスの中指にチロチロと舌を這わせたあと、ぱくつと口に含んだ。

そのとたん、甘い痺れがアニエスの身体を襲う。

「っつ、あ……」

アニエスの手の中指。そこもまた、彼女の性感帯の一つ。しゃぶりつかれ、時折甘噛みされるうちに、アニエスは再び身体に火が灯るのを感じた。

「んっ……」

中指を愛撫し続けながら、サフィールはゆっくりとアニエスの身体を抱き寄せる。

二人は寝台の上に横たわったまま抱き合い、肌を重ねた。

「んんっ、あっ……」

サフィールの左手が、アニエスの白い背中をゆっくりと撫で上げる。

その手はやがて下へ伸びていき、アニエスの柔らかな双丘を揉み始めた。

それだけでは飽き足らず、後ろからそろそろと割れ目をなぞり、蜜を垂らす秘所に触れる。その間も、彼の唇はアニエスの中指をしゃぶったままだ。

「や……もう……」

二度目の絶頂の気配は、最初より早く込み上げてきた。

堪らず涙目で訴えるアニエスに、サフィールはくすりと笑いを零す。

「もう？」

わかっているくせに、言わせようとしている。なんて酷い人だろう。

けれど彼のそんな態度さえ、今のアニエスには甘い毒のように感じられた。

「ひ……一人はいや……なの……」

遠回しに、彼女は夫を求める。

早く彼と一つになりたい。快樂に浮かされた今、アニエスの心にあるのは、その強い欲求だけだった。

「うん。俺も一緒がいい……」

サフィールはそう囁いて、彼女の手をそっと自身へ導く。

いつの間にか、彼の雄もすっかり硬く勃ち上がった。

その硬さと熱さに触れ、アニエスの内から悦びが込み上げてくる。自分が彼を強く欲しているように、彼も強く自分を求めているのだと知って、嬉しかったのだ。

「あ……はや……きてえ……」

「ん……っ」

アニエスのねだる言葉に頷き、サフィールは身体を起こすと彼女の足を開かせ、その間にぐっと自身を押し当てる。

ソレはゆっくりと、彼女のナカに押し入ってきた。

「ああああっ……」

手で触れるより、彼の熱を感じる。

アニエスはサフィールの首に腕を絡めて、ぎゅうっと抱きついた。

「……はあっ……、動くよ……」

「んっ……」

太股をしつかりと掴まれ、最初はゆっくりと、徐々に激しく腰を打ちつけられる。打ちつけられるたびに、肌と肌が触れ合う音と淫らな水音が響いて、まるで耳朶まで犯されるような感覚に陥った。

「ンッ、あっ、あああッ」

「……………」

「あっ、ああっ……………う……………」

気持ち良さど愛おしさが溢れ、心も身体も蕩けてしまいそうになる。

「……………アニエス……………」

「サフィール……………ッ……………あっ……………サフィール……………」

二人は荒い息を吐きながら、互いの名前を呼び、絶頂に向けて求め合った。

「アアアッ！」

一際大きく啼いて達した直後、アニエスの身体から力が抜けていく。

頭が真っ白になって、もう何も考えられない。

そうして脱力した彼女の身体に、サフィールは強く腰を打ちつけ続ける。

やがてアニエスは、自分のナカに熱いものが吐き出されたのを感じた。

「はあ……………はあっ……………」

すぐ傍でサフィールが呼吸を乱している。彼の額には汗が滲んでいて、それがぼたりとアニエスの頬に落ちてきた。

いつも涼しい顔をしている彼が、こんな風になるまで自分を求めてくれた。そう思うと、アニエスの胸に愛おしさが込み上げる。

「サフィール……………」

「ん……………。アニエス……………」

満たされた顔で、自分を優しく抱き締めてくれるサフィール。

(大好き……………)

心の中で呟きながら、アニエスもぎゅっとサフィールを抱き締め返す。

二人は繋がったまま、しばらく身体を合わせて余韻に浸っていた。

「んっ……………」

ようやく息が整ってきた頃、アニエスは指先でなぞるように、サフィールの背中を撫でた。

サフィールは背中が弱い。この行為は、彼に「もう一度」とねだる合図だ。

「アニエス……………」

自分の名を囁きながら見つめる夫の眼差しには、まだ熱が籠っている。彼だけではない。アニエスの身体にも、まだ火が燻っていた。

だから、もう一度欲しい。そんな情欲に突き動かされるままに、アニエスは自分から夫の唇を奪う。

「ん、んんっ、……………」

サフィールは妻の行動に驚きながらも、すぐにアニエスの唇を開かせて舌を絡める。

「はあ……ん、ん……」

口付けを交わしているうちに、自分のナカに入ったままのサフィールの雄がまた元気になっていくのを感じた。アニエスは嬉しそうに微笑む。

そして、そっとおねだりする。

「もう一回だけ、して……?」

「喜んで……っ」

「ひゃあ……っん」

頷くと同時にぐつと腰を突き動かされて、思わず声を上げてしまう。

彼はアニエスの太股を掴み、ゆつくりと腰を動かし始めた。

しかしその動きは先程とは違い、あくまでも緩やかで、もどかしいほど優しい。

「あつ、あつ……」

ぬぶつ、ぬぶつと、先程吐いた精を自身で捏ねるように、サフィールは穏やかな律動を続けた。

その動きに激しさは無い。しかしその分、アニエスの身体を労る優しさで、彼女の敏感な部分的に責め立てる丁寧さがあった。

「……んっ、気持ち良い? アニエス……」

「ん、んっ、うん。あつ、だめ、そこは……あつ……」

感じて堪らない場所を擦られて、アニエスは息も絶え絶えに喘いだ。

先程よりもたっぷり時間をかけて煽られ、再び快感が込み上げてくる。

「あつ、ああ……っ」

そうして二人は、共に絶頂を味わった。

次の日も仕事があるので、身体を重ねるのは二回までと決めている。それでも、今夜も十分に満たされた。

汗と体液でべとべとになった身体をもう一度浴室で清め、二人は寝巻に着替えて寝台に入る。

無言で自分を抱き寄せるサフィールの胸に顔を埋め、アニエスはうっとり目を瞑る。そして胸いっぱい彼の香りを吸い込んだ。

サフィールはアニエスの匂いが大好きだと言ったけれど、アニエスもまた彼の匂いが好きだった。同じ石鹸を使っているのに、自分のそれとはどこか違う気がする。彼を感じ、また欲しくなってしまうそうだ。

(……こんなんじや、私も今朝のサフィールを責められないわね……)

アニエスはそう考えて苦笑する。

情事のあと、眠りに落ちるまでの短い微睡みの時間。こうして彼の匂いに包まれていると、ちよっぴり胸が高鳴ると同時に、とても安心するのだ。

「ふふふ」

「アニエス?」

「なんでもないわ。ただ……」  
私は旦那様のことごとつても大好きだわって、思っただけ。  
そう囁く妻に、サフィールは一瞬目を見開いてから、嬉しそうに微笑んで答えた。  
「俺も、大好き」と。

### 家族でバカンス

七月に入ると、クレス島は海水浴シーズンを迎える。この季節は、最も観光客で賑わう時期だ。砂浜や港には、海水浴客向けにジュースやアイス、果物や軽食を売る露店が立ち並び、活気に満ちる。

賑わっているのは砂浜や港だけではない。港街もまた、いつもより多くの人で溢れている。そんな屋下がりの街中に、夕飯の買い物がてら一人で歩くアニエスの姿があった。

今日はパン屋の定休日。とはいえ、アニエスの休みは今の今まで家事で潰れてしまっていた。仕事のある日にも合間を縫って家事をこなしているのだが、休みの日には、普段手の届かない所まできっちり掃除をしたい。またお店を開く日に、なるべく食事の支度に時間をかけずに済むよう、スープストックを作ったり、ピクルスを漬け込んだり、ジャムを作ったりと、やることはいっぱいある。

使い魔猫達も手伝おうとしてくれるのだが、日頃たくさんお手伝いしてもらっている分、休みの日くらいは自由に遊ばせてやりたかった。

休日も何かと忙しいアニエスだが、家事は好きなので苦には思わない。

(あゝ、やっぱり隅々までお掃除をすると気持ちが良いわ)